

山梨大国際流域環境研究センター

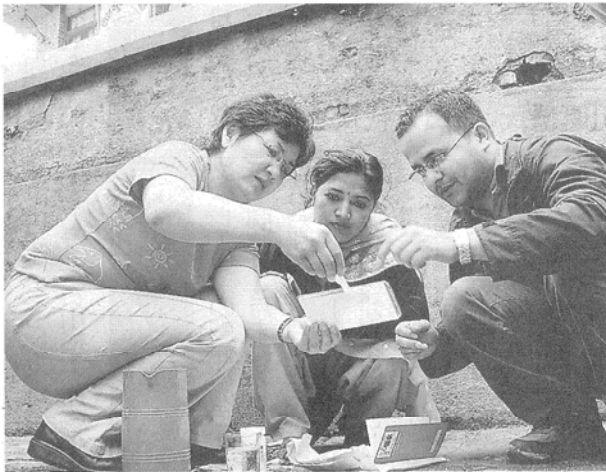
ネパールで水質改善を支援

慢性的な水不足に悩むネパールの首都・カトマンズ。住民が安全な生活用水を確保できるよう、山梨大の研究者らが支援に乗り出した。水資源に恵まれた山梨の地域特性から、大学には土木分野から環境分野まで「水」に関する幅広い専門家がそろった。その強みを生かし、今年度から5年計画でプロジェクトに取り組む。【松本光樹】

200万人以上が暮らすカトマンズは盆地にあり、大半の住民は井戸水で生活している。上下水道の整備が進んでおらず、地下水に下水が流れ込むなど水質は劣悪だ。乳幼児の死因の3割が感染症など水汚染によるといわれる。人口は増加の一途をたどっており、清潔な水を確保が達してきた。その系譜

未来への挑戦
山梨・研究最前線

砂など使う小規模浄水装置活用



現地で水質調査を行う風間ふたば教授(写真左端)とネパールのカトマンズで、写真はいずれも風間教授提供

を受け継ぎ、山梨大には水質分析、浄化処理、河川工学など水に関する研究者が多い。約10年前からネパールで独自調査を重ねてきた実績もあり、国の国際協力プログラム(予算はマップを基に浄水設備

「多くの研究者が来たが、水を探っていくだけだった」。風間教授の胸には、調査でネパールを訪れた際、住民から掛けられた言葉が刻まれている。「研究をいかに現実の改善に結び付けるかが大事」と風間教授。ネパ



現地に設置された浄化装置
ネパールのカトマンズで

をどこに置けば効率的に配水できるかななどを検討する。現地では連日停電があり、日本で作られるような電気を大量に使う浄水設備は非現実的。プロジェクトでは砂やスポンジ、微生物などを使う簡便で小規模な浄水装置を活用する方針だ。

「メモ」 世界保健機関(WHO)などは、水道や衛生的な井戸などの安全な水を利用できない人口が2011年にアジアやアフリカを中心に約7億6800万人いると推計。国連児童基金(ユニセフ)の13年度版報告書によると、年間約58万人の子供(5歳未満)が水質汚染などが要因である下痢性疾患で死亡しており、死因としては肺炎に続いて2番目に多い。今後も途上国での人口増加、温暖化による気候変動で水不足は加速すると考えられている。

99年には有志と「amanashi 水ネット」を結成し、市民による水質調査、子供の川遊び企画など水に親しみ、水を守る活動に取り組んでいる。「水問題は私たちの暮らしに強く結びついている。研究を深めるほど、専門を超えて総合的に取り組まなくてはいけない」と思う。

県内の大学や研究機関などでは、多くの研究者たちが働いていて遊んだ「川ガール」は身近な存在です。随時掲載予定。